「自己決定」がもたらす言説空間の閉塞
――人生相談における悩みの変遷より――

池田　知加*

戦後日本社会において，人々は何について悩み，何を人生の重大問題と考えてきたのだろうか。本稿では人々の悩みや葛藤の記録である人生相談を資料として利用しながら，戦後日本における社会意識の変動を分析する。まず，人生相談という「質的データ」を利用した社会意識研究を概観しながら，人生相談を相談者の独白と見なす従来の研究における分析の着眼点にかえて，人生相談を相談者と回答者のコミュニケーション的なやりとりと見なすという本稿独自の着眼点について述べる。そのうえで，悩みの主題の変遷から人生の問題の重心が家族から個人へと移行していることを確認する。さらに，女性のライフコースにおける「家庭」と「愛情」の意味変容を分析することによって，相談者と回答者のコミュニケーション的なやりとりにおいて「自己決定」のロジックがあらわれる過程を明らかにする。最後にU．ベックの個人化論を手がかりとして「自己決定」のロジックがもたらす言説空間の閉塞について考察する。

キーワード：人生相談，悩み，女性のライフコース，愛情，自己決定，個人化，U.ベック

はじめに

自分はどのような人間になるか，どのような生き方をすべきか，誰と一緒に暮らすべきか，今共にいる人と別れるべきか，どうすれば幸福になれるのか。個々人の人生において，こうした重大な問いに直面したり，重大な選択に迫られたりしたとき，何が重視されるのだろうか。たとえば，平成14年度の「国民生活選好度調査」によると，「なによりもまず家族を第一に考える」という考えに賛成する人の割合は全体で87.2％にもなるという。こうした考え方からすれば，重大な選択にせまられた時に，自分の個人的な充足感や目的よりも，家族全体のために行動することになる。家族のために続けたかった仕事をやめたり，休暇もとらず毎日会社へ行ったり，誰からも感謝されることのない家事を一身にひきうけるだろう。家族のために自己の欲望を抑制し家族に尽くすのである。

人は日々の生活の中で家族をはじめとして様々な社会関係の中で生きている。そして，個々人のライフコースにおいて結婚や就職などに関する重大な選択に迫られて悩んだときに，自分ひとりの意志や選択だけに基づいて判断しているわけではなく，家族や親族や友人などの

＊立命館大学非常勤講師

周囲からの助言や情報に左右されながら決断していく。しかしながら，自分が属している社会的な諸関係に拘束されずに，「自分の人生を切り開くのは自分自身だ」として，あたかも個々の行為選択に他者の存在や意向が無関係であるかのように自己の意思や選択だけに基づく「自己決定」が重視されることがしばしばある。そこでは家族のために自己の欲望を抑制するのではなく，個人的な目的のために自己の意志と選択を最重要視してその都度決断を下していくことが強調されるだろう。その際，家族は個々人のライフスタイルの選択の結果であって，自己実現の一旦としてのみ，あるいは自己の目的としてのみ存在することになる。

本稿では，戦後日本社会における人々のライフコースの中でどのような悩みや葛藤があり，一体何が重大問題と見なされてきたのかといった社会意識の変動をみるための糸口として「人生相談」をとりあげたい。人生の中で何を重視し，どのように生きるべきか，そしてある問題に直面したときにどのように対処すべきかといった人生上の問題の解決を示唆する様々な書籍やコラムなどがある。その代表的なものが人生相談であるが，どのように生きるべきか，何を頼りにすべきか，何を信じるべきかといったことが不明瞭になっている「不確実性の時代」において，こうした人生相談的な読み物への期待は高まっているといえる。それは，新聞や雑誌や近年ではインターネット上において展開されている多くの人生相談コラムやどのように生きるべきかといった人生問題的なテーマを扱う「自分探し」などと銘打ったセルフ・ヘルプ本[1)]の隆盛をみれば明らかである。

人生相談は現代社会における日々の生活の中で，人々がどのような問題に悩み，どのような事柄を問題とみなし，それらに対してどのような解決や対処方法を考案したかに関して，人々の生きた声が記された記録である。ともすれば人生相談で語られる悩みは，相談者の個別的な問題に関するものであり，それに対する回答も相談者の個別的な問題に応じた個別的な解決方法であるために「小市民的」とされる限界がある。つまり，個々の問題がすべて個人的なものとされ, 社会的な解決への道が閉ざされており，社会意識の変動を見いだす糸口には不適切なようにみえる。しかしながら，人生相談は新聞や雑誌などに掲載されることが前提にされており，匿名という条件のもとで公表される。そうすると，ある相談者の個別的な相談は同時に，その相談者と同じような問題を抱えるその他の読者に対する回答にもなる。つまり，個別的な相談が匿名という制度のもとで公表されることによって，その相談は相談者だけに当てはまるのではなく，またその回答もその相談者の問題状況にのみ当てはまるのではなく，同じような状況にいる人々にも当てはまるというように，ある程度の一般性をもっているといえる。そうした意味で人生相談は相談者の悩みという個別性をこえて社会意識一般を探り出す糸口としてとらえることができる。

以下では，まず先行研究を概観しながら，社会意識研究の資料として人生相談を利用する際の本稿における着眼点について述べる。そして，『読売新聞』に長期にわたって掲載され続けている人生相談コラムを1950年代後半から1990年代後半までの時点別にみることによって，悩みの主題の変遷について分析する。さらに，女性のライフコースに焦点をあてながら，個々人の人生における「家庭」や夫婦関係における「愛情」の意味がどのように変容したかを分析

することによって，個々人の人生と家族の関係がどのように変容したかについて検討する。最後に，人生相談でしばしば強調されるようになった「自己決定」というロジックに内在する問題点について考察する。それは，他者の判断や助言を求める問いに対して，「自己決定」のロジックによって，どのように答えることができるのかという問題である。「自己決定」を強調することは，他者に対して開かれたコミュニケーションの可能性を逆に閉ざしてしまう結果になるのではないだろうか。こうした人生相談という言説空間の閉塞性について，U．ベックの個人化論を手がかりとしながら検討することとしたい。

1　人生相談：独白か対話か？

1914（大正３）年５月２日，『読売新聞』の婦人家庭欄（「よみうり婦人付録」）に以下のような記事が掲載された。

> 一身上の出来事，例えば結婚，離婚，家庭の煩ひ及精神上の煩悶，婦人の職業問題等につき，男女に係わらず，凡て思案に余った事の御相談相手となり，及ぶ限りの力をいたし度いと存じます。ご相談は手紙で御申越し下さってもよろしく，御面談を望まるる方は，日曜を除き，毎日午後四時より六時迄に本社をお尋ね下されば喜んでお目にかかります。秘密を守るべき事につき，責任を負うのはもとよりでございます。手紙の節も，来社の節も特に人事の相談係と名指しを願います。（『読売新聞』1914.5.2）

これは日本で初めて新聞紙上に掲載された人生相談コラムの予告であるが，これをみてわかるように，人生相談とは相談者が「結婚，離婚，家庭の煩ひ及精神上の煩悶，婦人の職業問題」など生活や人生上の問題をうち明け，回答者からの助言によってその問題の解決の糸口を見いだそうとするものである。つまり，人生相談は，相談者が自分ひとりでは解決できない問題を回答者の助言をかりて，その問題の解決をはかるという相談者の負担を免除する機能をもつといえる。

自分では解決できない問題について他者に相談をするという問題解決の方法は人生相談に限られたものではない。たとえば，医師や弁護士へ相談したり，時には占い師や宗教家へ助言を求めたりする場合もあるだろう。しかしながら，人生相談によせられる相談は「純粋な法律や健康」にかかわるものではないため，その回答も法的判断や医学的知識からのみ提示されるものではない[2)]。また，「どのように生きるべきか」といった相談に対して，宗教のような超越的な観点から回答を提示することもない。つまり，人生相談は弁護士・医師・神・占い師と相談者の間に見られるような一方が明確な回答を心得ているという垂直的なコミュニケーションによってではなく，世論とそれを代表する必ずしも「正しい」答えを知っているわけではない回答者との水平的なコミュニケーションによって問題に対処するのである。それは，生死の意味を提供したり，救いを約束する宗教や，法律による裁きではなく，対等な人間と人間のコミュニケーションによる問題解決の方法である。

さらに，人生相談は相談者と回答者のやりとりを含めたより広い社会関係の中に位置づけることができる。人生相談の社会的な条件には，相談者と回答者に加えて，新聞や雑誌といったメディアの発達とそれらを消費する読者との社会関係が必要である。つまり，人生相談の構成要素としては，相談者と回答者，さらに相談者

と回答者のやりとりをとりあげ，両者を媒介する新聞社，雑誌社，編集者をあげることができる。こうした媒介者がいなければ一般に公開された人生相談は成立することはなく，媒介者がいるからこそ私たちは人生相談にふれることができるのである。さらに，新聞や雑誌といった媒体に公表された人生相談を消費する読者がいる。人生相談が商業的な媒体によって成立している限り，それを消費する読者の存在なくしては人生相談が継続的な読み物として存在することはできない。

先にみた日本で初めての人生相談の掲載予告からもわかるように，配偶者や親など家族成員に関する問題，あるいは相談者の個人的な性格についてなど人生相談によせられる悩みには大正時代から今日まで類似の主題が反復されている。しかしながら，そうした反復される相談者の悩みに対して回答者が提示する解決方法や対処法は時代に応じて変化している。それは，人生相談のコンテクストが相談者と回答者のコミュニケーションだけでなく，両者を結びつけるメディアとそれを消費する多数の読者を含むより広い社会的世界にあるからである。だからこそ，人生相談は相談者の個人的な悩み事という個別性をこえて，時代や世相を反映する社会意識一般を抽出することができる資料となるのである。

人生相談ないし身の上相談は，敗戦直後に民間の思想運動として発足した思想の科学研究会や見田宗介などによって社会意識研究における「質的データ」として活用されてきた。たとえば，思想の科学研究会による先駆的な研究において，人生相談は小説家などの「職業的な作家」ではなく，一般の人々の「日常的な思考の方法」を示すとして，ひとつの思想史的分析の資料として捉えられている（思想の科学研究会 1956）。同じく見田も人生相談があらわす「日常性」に着目しながら，一般の人々の日常的な思考方法だけでなく，さらにその日常生活の深部にある「不幸のさまざまな要因」を示すデータと見なし，そこから現代における不幸の類型を構成し，その「社会的基盤」と「不幸」の「要因・連関」について分析した（見田 1956）。

見田がいうように，人生相談において様々な悩みや問題が語られることから，相談者と同時代の人々にもかかわる「不幸」の様々な形態を見いだすことができる。しかしながら，私は人生相談が「不幸」を示すデータであるだけでなく，相談者が抱える「不幸」に対して，回答者がそれに対する対処法や解決方法といったより望ましいものを提示していることに注目したい。人生相談は，ある相談者の悩みに対して，回答者が何らかの解決を提示したり，助言したりするという相談者と回答者のコミュニケーション的なやりとりから成り立っている。つまり，人生相談は相談者がもっぱら自らの悩み事をうち明けるという一方的なものではなく，相談者の悩み事に対して回答者が回答するというコミュニケーション的なやりとりなのである。

しかしながら，人生相談を素材とした社会意識研究のほとんどは，相談者の悩みにのみ焦点が当てられ，人生相談があたかも相談者の独白だけで成立しているかのように扱われている。また，思想の科学研究会や見田の先駆的な人生相談の研究に続いて，相談者の悩みだけでなく，それに対する回答も合わせて分析した研究はほとんどなされていない。

本稿では人生相談を素材とした従来の社会意識研究に欠けている部分を補足するという意味で，人生相談が相談者と回答者のコミュニケー

ション的なやりとりであることに着目し，そのやりとりにおける問題の構築過程や，相談者の問題に対して提示される理想的な「生き方」という規範的な言説を示す資料として分析をすすめたい。それはまた，数量データをもちいた統計調査では把握することができない社会意識の内実について了解可能な形で理解することができるからでもある。たとえば，質問紙を用いた統計調査で「あなたの理想的な生き方はどのようなものですか」という問いを立てたとする。その際に研究者が規定する「理想的な生き方」という質問内容と回答者がイメージする内容が必ずしも一致するとは限らない。このように質問の作成にあたって「カテゴリー化」が問題となるが，それは調査上の操作的手順をふめばある程度解決できる。それ以上に問題と思われることは，質問紙に対する回答が人々のある事柄に対する一貫した態度や意見の表明であるということを質問紙調査が一般的に前提にしているという点である。

このような前提に対して，社会構築主義の視点から言説分析を専門にする社会心理学者のＪ．ポッターとM．ウェザエルは人々に一貫した態度や意見は存在せず，ひとりの人にインタビューしている間でさえ，ある事柄に対するその人の意見は「変動」すると論じている。たとえば，彼らは「人種問題」に対するひとりのインタビュー回答者の記録から，二つの対立的な意見を見いだしている。一方で，ニュージーランドで「聖書のクラス」を担当しているインタビュー回答者はマオリ人に対する差別的な発言をした子どもに「『それは人種差別的な意見で，気に入らないな』とたしなめた」と語り，他方で同じ回答者は「マオリ人もその前には先住のマオリ人みたいな先住民を殺したはずだし，つまり，最初から彼らの土地ではないわけで，それは〔われわれ白人が引け目を感じすぎるのは〕ちょっとばかげている」（Potter and Wetherell, 1987: 174, 175）とも主張している。

ひとりの回答者からとりだされたこの記録から，その人の「人種問題」に対する意見に統一的で安定した態度や考えを見いだすことは難しい。ここからポッターとウェザエルは人々の意見や態度はその人の内的状態のあらわれではなく，むしろそのやりとりの中に帰属すると見なし，そこでインタビュー回答者がどのような言葉を用いて何を行っているのかを調べることを提言している[3)]。

このような人々の規範的意見を収集するような調査の原理的な限界をふまえると，相談者と回答者のコミュニケーション的なやりとりから成り立っている人生相談を社会意識研究の資料とすることは，意見を収集するような調査の限界に対する一つの解決を提供してくれる。それは人生相談が相談者と回答者のやりとりの中である問題や出来事に対して彼らがどのような言葉を用いて，どのように語っているかを調べることができる資料だからである。すなわち，規範的意見というものが個々人の内面にあると見なすのではなく，相談者と回答者のやりとりに帰属するという見方をとることによって，質問紙調査などでは十分に把握することができない「どのように生きるべきか」といった人々の規範的意見についての内実をみることができるのである。たとえば，最初にふれた世論調査において「なによりもまず家族を第一に考える」とする人がおよそ９割とされているが，それだけでは，どういった意味で家族が重要視されているのか，そして，家族が重要だと考えられているにもかかわらず離婚率の増加など「家族の崩

壊」と称される様々な現象がなぜ生じているのかを理解することができない。本稿では，戦後日本社会のライフコースにおいて何が重要な事柄と見なされてきたかについての内実を把握することで，質問紙調査などの統計調査では十分に把握できない家族の価値の変容についても考察することとしたい。

本稿で用いた人生相談は『読売新聞』に長期にわたって掲載されている人生相談コラム「人生案内」[4]から，1958，1968，1978，1988，1998年の記事から抽出した（表１）。さらに，『週刊朝日別冊』の人生相談特集を『読売新聞』から収集した資料と比較対照するために用いた（表２）。双方ともに投稿者は女性が多く[5]，年齢別では20歳代と30歳代が多くなっている。

２　悩みの主題の変遷

（１）家族の問題の減少と個人の問題の増加

まず，戦後日本社会において人生上の問題や葛藤の主題がどのように変容したかについて確認したい。そこで，相談者が訴える悩みが生じている社会集団をみると家族，職場，学校，友人やサークル集団，近隣地域などがある。そこで生じている問題は，夫婦関係，親子関係，友人関係など，具体的な社会的場面における相談者と他者との「関係的な」悩みである。しかしながら，対人的な悩みではなく，自己の性格や容姿といった相談者自身についての悩みがある。そこで，相談者の悩みの傾向についてみていくために，相談者が訴える悩みが生じている

表１　使用データ１：『読売新聞』「人生案内」

年　　度	1958	1968	1978	1988	1998
有効事例数	125	316	300	301	306
性　　別	女性74.4％ 男性25.6％	女性83.0％ 男性17.0％	女性89.3％ 男性10.7％	女性87.0％ 男性13.0％	女性88.6％ 男性11.4％
年　齢　別	～10歳代　7.2％	～10歳代　4.4％	～10歳代　7.0％	～10歳代　16.9％	～10歳代　8.4％
	20歳代　29.6％	20歳代　30.3％	20歳代　20.0％	20歳代　20.9％	20歳代　31.4％
	30歳代　36.0％	30歳代　19.9％	30歳代　17.7％	30歳代　13.0％	30歳代　27.2％
	40歳代　11.2％	40歳代　7.6％	40歳代　12.0％	40歳代　13.0％	40歳代　11.0％
	50歳代　3.2％	50歳代　4.7％	50歳代　5.7％	50歳代　10.0％	50歳代　9.4％
	60歳代　―	60歳代　2.2％	60歳代　3.3％	60歳代　4.3％	60歳代　5.2％
	70歳代～　1.6％	70歳代～　0.9％	70歳代～　1.7％	70歳代～　3.0％	70歳代～　1.6％
	不明　11.2％	不明　30.0％	不明　32.6％	不明　18.9％	不明　5.8％

注１）有効事例数は相談と回答のやりとりを１事例とみなす。
注２）1958年度は９月１日から12月末までの記事を抽出。1998年は読売新聞社のホームページ（http://www.yomiuri.co.jp/）より収集，その他の年度は『読売新聞収縮版』より収集。

表２　使用データ２：『週刊朝日別冊』「現代ニッポンにおける人生相談」（1997年）

有効事例数	性別	年齢別
相談77 複数回答115	女性65.0％ 男性35.0％	～10歳代7.8％　20代歳19.5％　30代歳24.7％ 40歳代10.4　50歳代11.7％　60歳代6.5％　不明19.5％

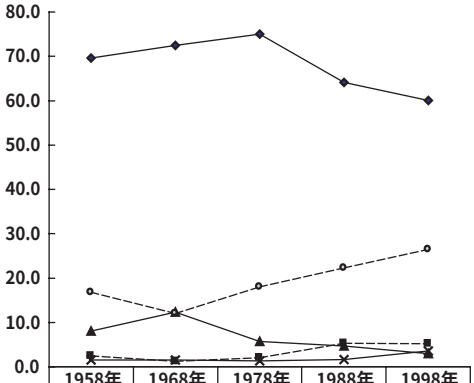
集団を①家族（配偶者，親，子，兄弟姉妹，祖父母に関する悩み）[6]，②職場や学校（部下や上司，教師や生徒に関する悩み），③友人・サークル集団（友人関係，恋愛関係に関する悩み），④近隣地域の四つの社会集団と，それらに加えて，相談者自身に関する悩みである⑤自己自身に区分し，1958年から1998年までの10年ごとの時点別に推計した（図１）。

この区分別にみた相談内容の推移をみると，家族に関する悩みがどの時点においても多数を占めているが，1978年から家族に関する悩みは相対的に減少の傾向にあることがわかる。それに対応して，自己自身に関する悩みの相談が増加している。また，友人や恋愛関係における悩みが減少し，学校・職場における悩みが増加している。

『読売新聞』「人生案内」における相談者の悩みの変化から即座に，日本人全体において家族に関する悩みが減少し，自己自身についての悩みが増加していると断定することはできないが，1997年に出版された「現代ニッポンにおける人生相談」をみると，自己自身についての相談が最も多く（45.5％），ついで家族（20.8％），職場・学校，友人・サークル関係，近隣となっている（図２）。

これらの悩みの分布の違いは掲載されている媒体（『朝日新聞』と『読売新聞』）や編集方針の違いであるとともに，相談者の年齢や性別分布と関係していると思われるが，ここではさしあたり今日の人生相談における悩みは家族に関するものと，自己自身に関するものの二つが主流となっていることを確認することができる。そして，戦後日本の人生相談からいえることは，夫婦や親子関係といった家族に関する問題が減少するにともなって，自己自身が大きな人生上の問題として浮上してきたということである。

データの収集や分析手法は異なるが，同様の分析を太郎丸博が「身の上相談記事から見た戦後日本の個人主義化」（1999）において確認している。太郎丸は1934年，1964年，1994年の「人生案内」から合計300強の記事を系統抽出し，「罪」「恥」といったキーワードを設定し，



	1958年	1968年	1978年	1988年	1998年
家族	69.6	72.5	75.0	64.1	60.1
職場・学校	2.4	1.3	2.0	5.3	5.2
友人・サークル	8.0	12.3	5.7	4.7	2.9
近隣	1.6	1.6	1.3	1.7	3.6
自己自身	16.8	12.0	18.0	22.3	26.5

図１　「人生案内」における悩みの変遷

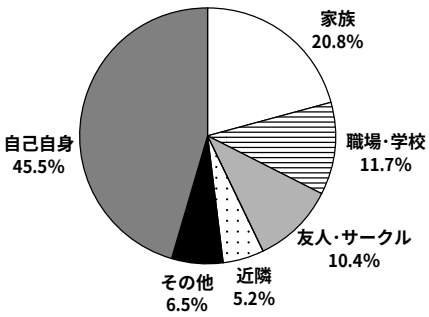


図２　『週間朝日別冊』における悩みの分布

その語句を数え上げるというコンピュータを用いたコーディングの分析手法を用いて，「戦後日本人の個人主義化」を確証しようとしている。ここでいわれている「個人主義」とは，D．ベルが『資本主義の文化的矛盾』において指摘した「社会的仕組みや慣習から解放され」た「個人的神聖性」（Bell 1973=1976, 1977）を重視するような思考方法や，またR．ベラーが『心の習慣』によって指摘したような「表現的個人主義」のうちの「セラピー的な思想」を意味している。たとえば，ベラーは「表現的個人主義の一形態」である「セラピー的な人間観」について以下のように述べている。

> その中心にあるものは，自律的個人である。この場合の自律的個人とは，個人を超えた高次の真理にもとづいてではなく，個々人自らが判断する生活効率の基準にもとづいて，自らの演ずべき役割となすべきコミットメントを選択することができると想定された存在である。（Bellah et al. 1985: 47 =1991: 55）

つまり太郎丸がいう「個人主義化」は，社会的規範や道徳といった「個人を超えた高次の真理」にではなく，「社会的な仕組みや慣習から解放」された「個々人自らが判断する生活効率」に基づく自己理解ないしは人生理解の社会的な浸透を意味している。そうして，太郎丸は，①「罪」や「恥」に言及している相談の割合が減少している，②人間関係への言及，とりわけ，「親子，夫婦といったこれまで一次的人間関係と呼ばれてきたような関係」への言及が激減している，③「病気，セクシャリティ（性的な嗜癖や性関係への言及），欠乏（貧困）」に関する言及は減少し，「孤独，困った性格，精神的問題」といった「個人的な主題」への言及が増加しているといった分析結果から，「戦後日本社会において個人主義化の趨勢」がみられるとしている（太郎丸 1999）。

以上，「人生案内」における悩みの主題の変遷をみると，戦後日本社会におけるライフコースの中心的な問題が夫婦関係や親子関係などの家族とそれらを内包する空間である家庭から，具体的な社会関係から独立した個々人の性格や心理状態や嗜癖など個人的な事柄へとシフトしてきているといえる。つまり，人生の中で解決すべき重要な問題は，家庭や近隣や職場といった社会的な場面における人と人との関係から離れた自己そのものになってきているのである。

（２）家族の問題から個人の問題への変容

人生の重大な問題が家族から個人へとシフトしているということは，家族に関する相談が減少し，自己自身に関する相談が増加したという悩みの主題の変遷においてだけでなく，家族に関する問題が相談者個人の問題へと変容するという相談者と回答者のやりとりにおいてもあらわれる。

事例１

【相談】再婚話に反対する息子

53歳の母親です。長男は板前修業の３年目，二男は大学３年生です。

夫を４年前に亡くした後も飲食店を続けてきましたが，板前が急に辞めることになりました。長男は「あと２年は修業したい」と言うので，やむなく店を閉じました。生活のために就職しなければなりませんが，私の年では仕事もなかなかみつかりません。

そんな折，店のお客さんで事業をしており，５年前に離婚した方と親しくなりました。二人の子供の面倒も見てくれると言うし，老後のことを考えた時に再婚するのが一番良いと思うようになり

ました。

しかし，二男が世間体が悪いとか親の身勝手とかという理由で反対し，迷っています。強引に再婚した場合，親子の断絶が怖いのです。私の考えは間違っているのでしょうか。

【回答】

あなたがいまお幾つであろうと，「彼が好き，彼と一緒に暮らしたい」という愛情が，再婚の基本だと思います。

ひとを愛するのに，年齢制限などないはずです。また，「世間体」がどれほどの意味を持つでしょう。親子の断絶を気にしておられますが，世間体を持ち出す息子など「母のほうから断絶」というのは極端ですが，母の幸せから考える息子さんだったら，と少しばかり残念です。

が，一時的には気まずさがあったとしても，きっと息子さんもいつかはわかるはずです。母をだれかにとられてしまうような寂しさと，亡き父親への思いがひとつになり，今は複雑な心境なのでしょう。

それとは別に少し気になったのは，相手の男性の「子供の面倒を見てくれる」という約束。また，老後のことを考えて再婚する，ともとれるお手紙の表現です。結婚も再婚も，言うまでもなく「老後の保険」ではありません。どんな時でも愛せる（その時にならないと，本当はわかりませんが）という彼への愛と，愛への覚悟が決め手になると思います。（『読売新聞』「人生案内」1998.5.21，回答者落合恵子，以下日付と回答者のみ記載）

この事例に登場する主要な人物は，相談者である53歳の母親，長男，次男，再婚相手である。相談者が再婚するにあたって問題になっているのは，「世間体が悪い」として反対している次男との関係の悪化であり，この場合，相談者の悩みは「家族」に関する問題といえる。

しかしながら，こうした「家族」に関する相談に対して，回答者は家族の一員としての相談者の状況ではなく，個人としての相談者の問題認識や態度に焦点を当てている。そして，「世間体を持ち出す次男」とは「極端」とはいえ「断絶」してもかまわないのではないかとして，相談者の家族に関する悩みを問題視しないのである。かわって，回答者がもちだすのは，次男に言われて「世間体」を気にする相談者の問題認識と，「老後の保険」として再婚しようとしているかにみえる相談者の態度である。回答者は相談者のライフコースにおける再婚という出来事，それにまつわる家族（次男）との確執を問題とみなさず，問題を相談者自身の問題と解釈することで本来あった相談者の「悩み事」を解消している。こうして，相談者の家族に関する問題は，相談者の態度や心がまえといった相談者自身の問題としてのみ，そして最終的には相談者の個人的な選択・決断としてあらわれるのである。

このように相談者が自らのライフコースにおいて重大な出来事に遭遇したときに，相談者にとっては一次的な集団である家族が要求する役割や家族成員の意向を考慮せず，相談者が自身でどのような役割を遂行するかを選択し，決断していくということは，相談者を拘束するもの（この場合は家族において期待される役割）からの「解放」を意味しているといえる。それは，個々人のライフコースの中で家族による拘束性が弱くなり，一人一人の人生と家族との密接なからみあいがゆるめられていくということである。そして，相談者は家族という拘束から解き放たれて自ら役割を選択し，決定していくような主体とみなされるのである。

（3）悩みの変遷の社会的背景

人生相談における悩みの主題において家族に関する事柄が減少している背景の一つには家族

形態の構造変動がある。総務省「国勢調査」によると，一般世帯の人員は1960年の4.14人から2000年の2.67人へと減少し，家族人員の少数化がすすんでいる。それは単独世帯の増加（1970年20.3％から2000年27.6％）と夫婦のみ世帯の増加（1970年9.8％から2000年18.9％）にあらわれている。とりわけ，65歳以上人口における単独世帯と夫婦のみの世帯が過去30年の間に大きく増加している。つまり，親と子が同居していない単独世帯と夫婦のみ世帯の増加によって，「嫁と姑」問題といったかつての人生相談における典型的な悩みが生じる家族形態が少なくなってきたのである。それが人生相談において家族に関する問題が減少した要因の一つと考えられる。

また，家族の問題が減少している背景には結婚生活や家族に関する意識の変化も大きく関係している。結婚には個人的・精神的な充足感が求められるようになり，結婚すべきであるという社会的な圧力は小さくなっている[7)]。また，結婚したとしても「相手に満足できない」場合には離婚してもかまわないと考えられるようになっている[8)]。このように結婚や離婚に関する意識が寛容になることによって，かつて家族に関する問題であった事柄が問題として認識されなくなるのである。たとえば，30歳を過ぎても子どもが結婚していないことは問題ではないし，浮気を繰り返す夫とは離婚してもかまわないのである。

さらに，性別役割規範とそれにみあった「夫は仕事，女は家庭」という家族形態が少数派となることで，妻＝母親という役割，男性においては夫＝父親という役割以外の側面が重要になってきたことがあげられる。「男は仕事，女は家庭」といった性別役割規範に賛同する人の割合は減少し，否定する人が増加するという傾向にあるが[9)]，実態面をみても，性別役割分業に対応した家族形態の数や割合は大きく変化している。男性一人が稼ぎ手で女性は家事育児に専念するというカップルは，第１次産業から第２次・第３次産業への構造転換と企業の雇用者の急増によってサラリーマンが急増した高度経済成長期に定着した。1955年から1980年にかけてサラリーマン世帯の専業主婦（非労働力）の人口を見ると517万人から1093万人に増加している（表３）。しかし，1980年以降，専業主婦の人口は減少し続けており，1985年から1990年にかけて，「サラリーマンの妻で専業主婦の割合」と「サラリーマンの妻で労働力の割合」が逆転し，1995年には「サラリーマンの妻で専業主婦の割合」は46.6％となり半数を割っている。つまり，1985年以降の慢性的な経済不況と雇用不安のもと，サラリーマンの夫と専業主婦世帯は少数派になり，共働き世帯が多数派になっているのである[10)]。また，出生児数の減少と平均余命の延長によって子育て期が短くなり，性別役割分業における妻＝母親という役割，男性においては夫＝父親という役割の比重が小さくなり，女性はもはや家事・育児に専念するだけの存在ではなくなり，男性もまた仕事に専念する夫という役割以外の側面がより重要性を増してきている。そこでは望むか望まざるかにかかわらず，家族の一員，あるいは妻＝母としての，夫＝父としての人生ではなく，自己の人生をどのように生きるのかという問題が浮上してくるのである。

このようなライフコースと家族をめぐる社会的な状況を背景に，人生と家族の結びつきはどのような変容を遂げたのであろうか。以下では，「女性の幸福」と「家庭」の結びつきの変遷，

夫婦間の「愛情」の意味変容に焦点をあてながら，女性のライフコースにおける「家庭」の意味，人生と家族の結びつきの変遷について，さらに詳しくみていくことにしたい。

3　女性のライフコースにおける「家庭」と「愛情」の変容

（1）「女性の幸福」と「家庭」の結びつきの変遷

「男は仕事，女は家庭」という性別役割規範にみられるように，かつて女性にとって幸福は「家庭」にあるとされていた。そこで「幸福」の源泉であるとされた「家庭」や「家族」とは一体どのような意味をもっていたのだろうか。そして，その意味はどのような変容をとげたのだろうか。以下ではふたたび，「人生案内」を時点別にみながら，「夫の行状」に関する悩みとそれに対する回答に焦点をあてることによって，「女性の幸福」と「家庭」の結びつきの変遷についてみていきたい。

まず1958年の「人生案内」における夫婦関係についての相談を一見したところ，「女性の幸福は家庭にある」ように思われる。だからこそ，浮気やギャンブルなど様々な「夫の行状」に対して，「家庭」を維持していくために夫に「従順」であることが求められていたのである。たとえば，「夫が浮気をしている」という相談者に対して回答者は「子どもが新しいおもちゃをほしがってダダをこねているとでも思い，あせらず徐々にその熱をさますようつとめられたらと思います。……あなたご自身も勝気すぎた自分が夫には重荷だったと反省しておられるように，もう一度自分をみなおし，やさしい魅力のある妻になるよう心がけて下さい」（「人生案内」1958.11.27小糸のぶ）と答えている。また，「外づらばかりよく……家では子にもどなり散らす」主人について苦情を述べている相談者に対して，回答者は「ご主人の立場になってみると，妻子は，夫であり父である自分を，暖かく包みこもうとしないで，ソッポをむいていると見えるにちがいありません。……どこまでも母子四人が，一つになって，ご主人を包んでしまうことを，何度も何度もくり返すこと」（1958.9.18大浜英子）と答えている。

これらの回答をみると，1958年において，夫に対する「従順」が家庭の円満につながり，

表３　1970年代までサラリーマンの増加とともに増えた専業主婦

	1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995
全有配偶女性に占めるサラリーマンの妻の割合（%）	41.5	49.0	56.7	60.9	－	66.2	70.8	70.2	71.8
サラリーマン世帯の専業主婦の数（万人）	517	643	797	903	－	1093	931	878	925
専業主婦の数（万人）	890	995	1104	1222	－	1526	1281	1255	1333
サラリーマンの妻で専業主婦の割合（%）	74.9	70.5	66.1	62.0	－	56.6	50.8	47.1	46.6
サラリーマンの妻で労働力の割合（%）	25.1	29.5	33.9	38.0	－	43.4	49.2	52.9	53.4
サラリーマンの妻で農林漁業，自営，家族従業員の割合（%）	14.9	15.2	12.9	13.0	－	10.6	8.6	7.5	6.0
サラリーマンの妻で雇用者の割合（%）	10.0	14.2	20.7	24.7	－	31.8	39.4	44.2	45.7

注１）雇用者（非農林業）をサラリーマンとする。専業主婦は，全有配偶女性で非労働力の割合とする。なお，サラリーマンの妻で専業主婦は，夫が雇用者（非農林業）で妻が非労働力（無業）のものとした。
注２）1955年から70年までは，総務庁「国勢調査」により，80年以降は，総務庁「労働力調査特別調査」により作成
出典）経済企画庁『平成９年版国民生活白書』

ひいては幸福を意味しているように思える。しかしながら，妻である相談者に「従順」が求められない場合もある。それは「あまりにも従順すぎる……態度」や「忍従」がかえって逆に，夫の行状をさらに悪化させるからである。すなわち，「従順は妻の美しい徳ではありますけれども，夫が不正不倫の行動をとろうとすることに，いいなりになって協力するのは明らかにまちがっています。……あなたのあまりにも従順すぎる，わるくいえば意地気のない態度が〔夫の行状を〕そこまで増長させたのではないか」（1958.9.1小山いと子）と考えられるのである。しかしながらここで注意しなければならないのは，「美しい徳」である「従順」が否定されるのは，「夫の行状」に悩む相談者のためばかりではないという点である。それは「従順」や「忍従」によって「つけあがった態度」を増長させた「夫」や「日本の男性」のためでもある。たとえば，「従順」によって夫の浮気を増長させたことを指摘しながら，回答者は「ご主人に好きなようにさせてはいけません」と黙って従うのをやめるように相談者に促している。それは「ご主人をも破滅に追いやるから」である。

こうしてみると1958年において，夫に対する「従順」だけが女性の幸福ではないと考えられていたことがわかる。それは，妻の「従順」によって夫の好ましくない行状がひきおこされることがあるからであり，夫の「破滅」は妻の「破滅」でもあるからである。また，夫が精神的・身体的な病気であるとされたり，「変質者」であるとされたりする場合など「夫の行状」の程度に応じて「離婚」が指示される場合もある。ここで離婚が指示される相談にみられる共通点は，結婚生活の継続によって「生活の安定」が保証されない場合に離婚がすすめられるという点である。すなわち，「夫をたよって将来の設計をすることは不可能」（1958.10.2木々高太朗）である場合，あるいは相談者に「生活の保証」がある場合には，「従順」よりもむしろ「自分自身の生活の安定を含めた自分のしあわせが，夫をたよりにして必ず実現するか，あるいはかえって夫ゆえに破滅の方向にいくかそれをよくよく考えて踏み切ることが大事」であり，「離婚はのぞましくないが，ある場合には，自他共に認めなければならない」（1958.9.13大浜英子）のである。

以上をみると，1950年代後半において，「女性の幸福は家庭にある」ということの意味は「従順」によってもたらされる「生活の安定」であるように思われる。夫と子どもがいる「家庭」そのものが相談者に幸福をもたらすのではない。家庭とは夫婦関係が破綻していながらも，「生活の安定」のために「守らなければならぬ妻の座，母の座」（1958.10.5小山いと子）がある場なのである。

1968年における夫婦関係についての相談を見ると，1958年と同じく「女性の幸福は家庭にある」のだから，夫に対する従順が求められているように思われる。しかしながら，それは夫への従順によってもたらされる「生活の安定」だけを意味しているのではなく，夫と子どもとの平穏な暮らしを意味するようになっている。すなわち，「なに一つ欠点のない立派な人を夫に持ち，三人の子どもの母親となって平和にくらせば，女のしあわせはこれに過ぎることはない」（1968.4.25福島慶子）のである。それだからこそ，「夫の浮気」に悩んでいる相談者に離婚をすすめるような回答はほとんどなく，一度浮気をしたとしても「十年間も自分一人を守って愛してくれた夫に，感謝してもよいほど」

（1968.5.1小山いと子）と，夫が戻ってくるのを耐えて待つように指示している。夫と子供がいる家庭そのものが幸福なのだから，たとえ夫の浮気によって夫婦関係が破綻していたとしても家庭という幸福のいれものを消滅させる離婚は避けなければならないのである。

1978年をみても，事情は1968年とさして変わりはない。この間，サラリーマンと専業主婦の数は増加し，女性労働力率が減少している中で「女性の幸福は家庭にある」とされ性別役割が固定されていた。したがって，浮気，ギャンブル，浪費といった夫の行状に対して，妻である相談者には，「ご主人をたてる家庭生活」，夫に対する「少々の努力，献身，譲歩」を心がけ，自分自身の態度を反省することなどが指示されている。

それが1980年代後半になると，「夫の行状」に悩んでいる相談者に対して回答者は夫の行状に耐えることよりも，むしろ夫からの経済的な自立を確立した上で夫と対等な関係になるという義務よりも権利をよりいっそう強調するようになっている。すなわち，夫の行状に「耐えるだけが人生ではない」（1988.11.10三枝佐枝子）のだから，「あなた自身の生き甲斐をこそ考えるべきであって」，そのために「〔ひとりで暮らすことの〕覚悟をしっかり」（1988.8.18早乙女勝元）もっていなければならない。そして，まずは夫から「石にかじりついてでも自立する〔ように，そして〕そうなった時初めて，夫とあなたとの間に対等な関係」（1988.1.11三枝佐枝子）が成立するのである。

こうしてみると80年代後半になって，夫婦間の対等な関係についての考え方が劇的に変化していることがわかる。1978年においては「夫の浮気」に悩んでいる相談者に対して，回答者は「これからの家庭では，やはり夫婦はお互いに平等の立場でそれぞれの義務を果たし，権利を求めるべき」（1978.1.11平岩弓枝）であると答えている。ここでは夫婦が対等な関係になるために，それぞれの義務を果たすこと，つまり，夫は仕事，妻は家庭に専念すべきであるといった性別役割規範に基づく義務を果たすことが必要であると考えられている。これに対して，1988年においては，妻が夫から経済的な自立を確立するという男性役割の女性への拡大という意味で互いに対等な関係になることが重要であると考えられている。

それでは，1998年においては，「夫の行状に悩む妻」の相談に対してどのような回答がされているだろうか。今日では，「夫の浮気」といったことは「人に相談するような問題ではない」と答えられるかもしれない。なぜなら，「夫の浮気癖〔は以前から承知していたことであり〕厳しいことを言えば，すべてはあなたの責任」（1998.6.14瀬戸内寂聴）だからである。

このような回答は極端だが，「夫の行状に悩む妻」の訴えに対して「夫に生活態度を改める」（1998.4.3鍛冶千鶴子）ように働きかけてもだめならば，「理由はどうであれ，夫婦が信頼できなくなったのなら，離婚を選択肢の一つ」（1998.4.12大森一樹）と考えることは当然であるし，「お二人ともまだ人生半ばですから離婚してやり直した方がすっきりして有意義だと思います」（1998.9.25里中満智子）といった回答が典型的にみられる。結局のところ，夫の行状や経済的な問題がどうであれ，「あなたがこれからどう生きていかれるのか。それはもとより，あなた自身が決めること」（1998.4.4落合恵子）なのである。

1990年代後半においては，「夫の行状」に対

する解決策はそれに耐えることや経済的な自立を確立した上で離婚することだけではない。離婚は「選択肢の一つ」であり，まずは夫に対する自分の気持ちを再確認すること，夫や子どものためではなく，自分自身のために夫への愛情を自分に問いかけることを回答者は相談者に指示している。つまり，「夫にとって自分が必要なのかを問うよりも，まずあなたにとって夫は必要なパートナーなのか，を考えて」（1998.5.31落合恵子）みることが必要なのである。

以上から，女性にとって幸福の象徴であった「家庭」は，「生活の安定としての家庭」（1958年）から，「精神的に支え合う夫婦関係のある家庭」（1968年と1978年）にいたり，「夫と経済的に対等な関係を結ぶ家庭」（1988年）から「自己実現の場の一つとしての家庭」（1998年）へと変化していることがわかる。こうして，女性にとって「家庭」はもはやそれ自体で幸福を示すものではなくなった。それはつねに自身にとって幸福をもたらしているのかどうかを確認しなければならない場となった。すなわち，「女性の幸福」は夫の収入や愛情，子どもがいる家庭にあるというよりもむしろ，相談者が自らに問いかけるものになったのである。

（2）夫婦関係における「愛情」の変容

「家庭」がそれ自体で幸福を意味するものでなくなったなかで，家族の中心である夫婦関係，とりわけ，夫婦を結びつける大きな要素である「愛情」がどのような変容をとげたのかについて確認していきたい。

1958年の「人生案内」をみると，夫婦間の「愛情」という言葉がほとんどみあたらない。つまり，夫婦関係において「愛情」というものが重視されていなかったか，あるいは「愛情」という言葉でもって夫婦関係のあり方が表現されることがなかったと考えられる。1958年において，精神的な結びつきよりも，金銭的な結びつきによって「家庭」が規定されていたように，夫婦は愛情によって結びついているという意識が普及していなかったのである。

1968年では，いくらか夫婦関係における「愛情」について語られるようになっている。しかしそれは夫婦間における情緒的な感情ではなく，夫が収入を家庭に持ち帰ってくるということを意味している。たとえば，夫が浮気をし，家を出ていったにしても，回答者は「夫の愛情」があるとして以下のように答えている。

- 「『ご主人は，キチンと月給を持ってくる』とあなたはおっしゃいますが，それはあなたへの愛情のしるしでは……」（1968.3.8大浜英子）

- 「ご主人の場合は，母親に意見されれば家に戻ることを約束しているし，家族の生活費は忘れずに毎月とどけてくるし，子どもの顔を見ればふろに入れてやるほどの愛情と責任感はもっているのですから，家庭が居ごこちよければ，自然と家庭に戻ってくる可能性はあると思うのです。……物事を自分中心にばかり考えず，なぜこんなことになったのかも反省して下さい」（1968.5.10福島慶子）

このように，「夫の愛情」が生活費を忘れずに届けたり，月給を持ち帰ってきたりすることであるとすれば，「夫の浮気」は「夫の愛情」を失ったことを意味するのではない。夫が生活費を入れなくなったときにはじめて，相談者は「夫の愛情」を失ったことになり，離婚が語られることになる。すなわち，1968年における夫婦関係の「愛情」は「夫が収入をもちかえってくる」という金銭に裏打ちされたものであるといえる。

1978年になると，夫婦関係における「愛情」の中身が異なっていることがわかる。そこでは「夫の愛情」が「夫の収入」を意味するのではなくなり，夫婦間の関係において経済的な意味よりも精神的な意味が強調されるようになっている。たとえば，「人工透析で入院」している夫と離婚するかどうかについて悩んでいる相談に対して，「金銭的にあなた〔相談者＝妻〕が支えになるよりも，もっと精神面での支えが求められる」（1978. 9.29沢地久枝）とされ，夫が経済的に家族を支えていくのが困難であっても，離婚をせずに逆に夫を精神的に支えていくようにすすめられている。このように夫婦関係において，経済的な結びつきではなく，精神的な結びつきがより重視されるようになると，「夫の浮気」といった事態に直面した場合に，回答者は金銭に裏打ちされた「愛情」というロジックを使うことができなくなる。すなわち，1968年において，夫の浮気によって夫婦の結びつきに疑問が生じたとしても，経済的な面で夫が家族に貢献しているのであれば「愛情」があるとされていたのが，経済的な結びつきだけでは夫婦の間に「愛情」があるといえなくなると，金銭以外で愛情を示す何らかの指標が必要になってくるのである。そこで，夫の浮気に悩む妻＝相談者に回答者がしばしばもちだすのが「忍耐」のロジックである。すなわち，夫が浮気をしても，「必ずまた自分の胸にもどってくる，と信じて努力」（1978.2.4小山いと子）し，「あなたのやるべきこと，会社での職務と家事をちゃんとやり，しばらく知らん顔を」（1968. 6.14戸川エマ）し，「耐えて通り過ぎるのがいちばん賢明」（1978.1.13沢地久枝）なのである。こうしてみると，1978年における夫婦間の「愛情」は妻の側の一方的な「忍耐」を意味していたといえる。そこには夫婦間の情緒に満ちた関係ではなく，どこかしら諦念した寒々とした夫婦関係がかいまみえる。たとえば，結婚生活30年を向かえた54歳の相談者が夫の浮気を知り，別れるべきかどうか悩んでいる相談に対して回答者は以下のように答えている。

> ……今，ご主人の浮気（少々深入り浮気の感じではありますが）に遭遇して，一，わかれるか。二，復讐するか。三，信仰の道に入るか。四，このままで一生を送るか――の岐路に悩んでいらっしゃるわけですね。
>
> ……
>
> ではどうするか？妙な言い方ですが私は前記四項目に全部反対であり，同時に全部同感でもあります。まず，一では食べてゆけないし，二は子供のあそぶカンシャク玉と同じで無意味だし，三は尼さんになる必要はないし，四はせっかくの投書のかいがない。一方，同感とはいうものの，現在のあなたの心持ちをそのまま認めたうえで，視点を変えることをおすすめします。人間は所詮は孤独なものです。どんなに愛し合っても一心一体にはなれません。奇妙なことに夫婦となればそれが特にひどく，相手が死ねばいいと一度も思わなかった夫，あるいは妻はないと昔からいわれています。
>
> そう考えて，さびしいときは座禅を組み，そして若山牧水の歌「秋の夜の，酒は静かに飲むべかりけり」のように，“一人生きる”境地でいきましょう。（1978.9.26小山いと子）

ここで回答者が述べているように，夫婦の間に情緒的な意味での愛情がなくても離婚せず，「一人生きる境地」で夫への「忍耐」が求められていた背景には，離婚すると「食べてゆけない」という女性の社会的・経済的な条件があったといえるだろう[11]。それが1988年になると，夫婦間の関係において夫の浮気や離婚という問題に直面した場合に，夫に経済的に依存さざる

を得ない妻＝専業主婦が主題として登場してくる。ちょうど1980年代後半は既婚女性の労働力率が半数を超え，サラリーマン世帯における専業主婦世帯と共働き世帯の割合が逆転した時期である。それに対応するかのように人生相談において，夫からの経済的な自立というテーマが浮上してきたのである。1978年においては，夫から経済的に自立するということは語られなかったのが，1988年においては，夫婦関係における「愛情」がもはや妻の一方的な「忍耐」を意味するものではなくなると同時に，「夫からの経済的および精神的な自立」が強調されるようになっている。夫の浮気に対して，離婚するかどうかはさておき，何よりも大切なことは，「『誰か』に頼りすぎた人生は，『誰か』の人生に左右されるもの」（1988.4.6落合恵子）なのだから，「自分できちんと責任のもてる人生を開拓〔し……〕自立した女性」になる（1988.3.11早乙女勝元）こと，「外へ出て働くことも大切ですが，一番大事なのは，精神的に屈辱的な立場ではないということ……精神的にも経済的にも，ほんとうの自立を」（1988.10.13三枝佐枝子）すること，「自分自身と子供のためにきちんと自立した生活を始めるべき」（1988.1.29深沢道子）なのである。このようにして，「夫からの経済的および精神的な自立」という課題が強調されると，夫婦間の「愛情」は主題としてあらわれなくなっている。つまり，1988年になると，金銭に裏打ちされた夫婦間の「愛情」も，一方的な「忍耐」を強いる「愛情」も否定される代わりに，「自立」が強調されることによって，「愛情」に対する沈黙が生じたのである。

1998年になると夫婦関係における「愛情」が再び語られるようになっているが，その意味内容は大きく変化している。かつて，「愛情」は「夫への忠誠」や「あたたかい家庭をつくる」といったように行動をともなうものであった。それが1998年になると，「愛情」は相談者が所有する一つの感情となり，自己内省によって確認するものとなった。つまり，「夫への愛情」が「どこまで本当なのか真摯に」自分で確認するものとなったのである。

事例２

【相談】以前の女性客らと夫が交際

30歳代の専業主婦です。子供は２人います。

１歳年上の夫は以前，家計の足しにとホストクラブでアルバイトしていたことがあります。そのころの顧客数人と，夫は今も付き合い続けています。

夫は「今の世の中の状況を考えると，顧客と関係を保つ方が，自分の店を持つなど責任ある仕事に就いた時，役に立つ」と言います。やましいことはしていないし，一番大事なのは家族だとも言いますが，私には理解しにくい考えです。

夫が仕事の後に彼女たちと会うのは，私にはつらいことです。夫と話し合うと，「妻の座にいるんだからわがまま言うな，離婚するぞ」とまで言われました。

私は彼を愛しているし，必要です。経済的自立の手立てはなく，実家もありません。でも彼の考え方についていけない以上，離婚するしかないのでしょうか。

【回答】

あなたの夫の言うホストクラブ時代の顧客といまだに付き合っている理由が，理解し難いのはあなただけではありません。

私も同じです。世の中の状況とか責任ある仕事といったそれらしい言葉を並べても少しも説得力を感じません。いくら，やましいことはしてないと言っても，その行動は家族を一番大事にしているという言葉と矛盾しているように見えます。ましてや，妻の座にいるんだからわがまま言うな，

離婚するぞなどという言葉はとても家族を愛しているとは思えません。

そのような夫の言い分を黙って受け入れて生きていくタフな精神を持つことも，夫からの経済的自立を求めて自分にできる仕事を探すことも選択の道としてあるでしょうが，その前に，あなたの方も「彼を愛している，必要です」という言葉がどこまで本当なのか真摯（しんし）に自分で確かめるべきだと思います。家族の愛を言葉だけで済ましている夫と同じように，あなたも夫婦の愛を言葉だけで済ましてはいないでしょうか。

（1998.8.13大森一樹）

この事例をみれば，夫婦間における「愛情」は夫への献身といった具体的な行動から，個々人の心の内にある抽象的な心理状態を意味するようになったということが理解できる。それは相談者の心の内に存在するのだから，夫への「愛情」を相談者が自ら問うことによってしか確認することができないのである。つまり，夫婦における「愛情」は互いの自己内省によってはじめて理解できるものになったのである[12)]。

かつて女性の幸福は家庭にあるといわれていたが，1958年において「幸福」をもたらす「家庭」は，夫が収入をもってかえるところであり，「生活の安定」をもたらすという意味をになっていた。夫婦関係が金銭によって結びついていると考えられていたところでは，夫婦における情緒的な意味での「愛情」について語られることがほとんどなかった。それが高度経済成長期を含む1968年から1978年をみると，経済的な意味だけでなく，夫婦と子供の精神的な結びつきという情緒的な意味で「家庭」が語られるようになった。夫婦関係における「愛情」の中身をみても，1968年においては「愛情」が「夫の収入」を意味していたが，1978年になると「愛情」と金銭の結びつきがゆるめられ，精神的な意味が重視されるようになっている。高度経済成長期を経た1978年は，終身雇用と年功序列制度の普及にともなって唯一の稼ぎ手であるサラリーマン＝夫と専業主婦＝妻のカップルが普及した時期にあたる。そこで夫は家族のために，妻は夫や子供のために，それぞれの役割を果たすことが強調され，とりわけ女性には家族のために働きに出る夫の様々な行状に対しても「忍耐」でもって答えるということが要請された。夫の様々な行状に対して「忍耐」でもって接することが「愛情」を意味していたのである。

それが1980年代後半になると，夫に経済的に依存せざるを得ない女性＝専業主婦の立場に対する問題意識が芽生え，夫から精神的にも経済的にも自立することが強調されるようになっている。そして，1990年代後半において「家庭」はそれ自体で幸福を意味するものでなくなり，つねに自身にとって幸福をもたらしているのかどうかを確認しなければならない場となった。つまり，「女性の幸福」は夫の収入や愛情，子どもがある家庭にあるというよりもむしろ，相談者自身が家族内の夫婦や親子関係の中で自ら確認していくものになったのである。

同じように，夫婦における愛情も夫のために何かをするという行動をともなうものでなくなり，個々人が自分で自分に問いかけて確認するものになった。1990年代後半になって，「家庭」が幸福をもたらすかどうか，夫婦関係において「愛情」があるかどうか，つまり，私は今幸福なのか，私は今夫に愛情を感じているかについて自己内省によって確認しなければならなくなったのである。このようにして夫婦関係における「愛情」は個々人が自己内省的に確認するも

のとなり，かつて密接な結びつきのあった「家庭」と「幸福」についてすら，個々人がその都度相対化していくことが要請されるようになったのである。そこで重要なことは，「あなたが愛せるあなた自身の人生」（1998.4.4落合恵子），「自分の生活を充実させるのを最優先すること」（1998.3.1深沢道子），「あなた自身が自分に納得のいく暮らし方をし，自分に対して『良い感じ』，満足感を持つこと」（1998.4.8深沢道子）であり，相談者をとりまく人々，それが夫であれ，子どもであれ，そうした周囲の人々を配慮することではない。このようにして「あなたの人生を決めるのはあなた自身です」という「自己決定」のロジックが導き出されるのである。

４　「自己決定」がもたらす言説空間の閉塞：ベックの個人化論を手がかりに

1950年代後半から1990年代後半までの人生相談において語られた人生上の悩みをみると，家族に関する主題が減少し，個人的な事柄に関する主題が増加していることが確認できた。それは，夫婦や親子関係といった家族ではなく，自己自身が大きな人生上の課題として重要視されるようになってきたということであり，人生の意味を家族とのかかわりに見いだすのではなく，自己自身の内部に見いだすことである。このような個々人のライフコースにおける重点が家族から個人へと移行している過程を近年社会学理論において注目されている個人化論，とりわけ家族社会学においても大きなインパクトを与えたU．ベックの個人化論を手がかりに考察することとしたい。

個人化は近代化とともにN．エリアスやM．ウェーバーなどによっても論じられてきたが，ベックのいう個人化は，近代社会における階級意識や核家族（性別役割規範）といった「意味供給源」の解体ないし喪失によって，「すべての意思決定が個人に委ねられるようになる」という「新たな生き方」を意味している（Beck 1994=1997）。これはウェーバーが解明した「呪術からの解放」としての個人化とは異なるベックがいうところの「第二の近代」ないしは「再帰的近代」において生じている過程である。この「新たな生き方」の中での個々人の人生と家族の関係についてベックは以下のように述べている。

> 個人化を推進する力が家族へ拡大すると共に，共同生活の形態が例外なく変化しはじめた。家族と個人の人生との関係はゆるめられた。男女の親としての人生を中核とする終身にわたる単位としての家族は，例外的なものとなっている。……交替可能になった家族関係のもと，家族の内側と外側で，男性と女性のそれぞれの人生の独立性が，あらわになってきた。誰もが，その時々の人生の段階に拘束された家族生活を送り，そしてまた家族から自由な形態の生活を送るようになり，ますます自分自身の人生をすごす。……家族と（家族のこちら側とあちら側の）個人の人生との優先順序が逆転したのだ。（Beck 1986: 188-189 =1996: 231）

ここでベックがいう家族か個人かという優先順位が逆転していく過程を，夫婦関係という家族における中心的な関係についての相談と回答のやりとりに確認することができる。

誰かのための人生ではなく，「自己決定」を重視した自分自身のための人生は，一方でこれまで拘束されてきた役割規範や社会関係からの「解放」を意味している。かつて人生の様々な場面で強力な拘束力をもっていた役割規範の解体ないしは喪失によって，あたかも周囲の社会関係とは無関係であるかのように，個々人が自

分の人生を自分で決定し，つくりあげていくことが可能になった。つまり，従来の伝統的な扶養関係や人との結びつきによって「あらかじめ与えられていた人生」＝「誰かのための人生」から解き放たれて，選択主体としての個人の判断や決定に人生がゆだねられるという「つくりあげられる人生」＝「自分のための人生」となったのである。そうした意味で個人化は，選択の自由の拡大と伝統的な社会関係や扶養関係からの「解放」を意味しているといえるだろう。たとえば，相談者は誰と結婚するかについて，あるいは，いつ離婚するかについて，「家の犠牲」になることもなく，「世間体」や他人の意見に従う必要もなく，自分の意志で決めることができるのである。

このように「個人化」は一方で従来の社会規範の拘束力からの解放と選択肢の拡大を意味しているが，他方で，「個人化」の趨勢から逃れることはできないという意味で強制的な側面をもち，選択の自由をもたらす一方で，自由の閉塞性をももたらすという相反するベクトルを含んだ両義的な過程である[13]。

いみじくもベックが強調しているように，「個人化は決して諸個人の自由な意思決定に基づいているのではない」（Beck 1994:14=1997:32）。個人化は選択の拡大をもたらすのだけれども，個人化という趨勢に参加しないという選択は許されていないのである。とりわけ，強制としての個人化が問題をはらむのは，個人自身が社会的なものの単位になることによって，社会制度と個々人の生活の間の矛盾が「自己決定」あるいは「自己責任」という名のもとですべて個々人の機能不全として，個々人自らの人生の中で個人的に解決すべき事柄だとされるのである。たとえば，突然の失業や夫婦間の緊張から生じた結婚生活の破綻は，社会的な問題としてではなく，「有能な社員となるべく自らの能力を高めるための努力を怠った」，または「家庭をかえりみない相手を選択した」などとして個人的な失敗としてのみとらえられてしまうのである。

個々人の心理面からみれば，強制としての個人化は人々に孤立感をもたらす[14]。くりかえしいうように，個人化とは自己を人生の中心におき，個々のライフコースにおいて様々な問題に直面したり，何らかの選択に迫られたりした時に，他者の意見や他者の存在を配慮するよりも自分の目的や情緒的な満足を重視するという自己中心的な世界像を展開していくことである。しかしながら，はじめにみたように多くの人が今なお人生において家族が最も重要だとしているし，永続的なパートナーを得ることを望んでいる。にもかかわらず，独立した個人として自己を中心に構築された人生には他者をむかえいれる余地はなく，孤独へとおちいらざるを得ない。それは人と人とを結びつけ，他者と人生を共有するためにあった「愛情」の意味変容におけるジレンマをみれば明らかである。一方で，誰かを「愛する」ということは，相手のために何かをするといったように奉仕や義務をともなうが，他方で今日望ましい愛情関係は相手の情緒的な満足を満たすことではなく，自分の情緒的な充足感を得ることとされる。つまり，「愛情」には相手のことを配慮したり，ある種の自己の感情を超えた義務をひきうけたり，時には自らの利益を犠牲にすることが避けられないにもかかわらず，「愛情」に満ちた関係を維持するためには個人的な充足感を最優先し，相手を配慮することなく自己中心的であれと要請されるのである。

このような「自己決定」と自己の情緒的な満足を重視することは，個々人の人生のあり方を語る言説空間の閉塞をもたらす。それは個々人にとっては重大な人生の問題を扱う人生相談において相談者の「自己決定」を重視するというロジックに内在する矛盾をみれば明らかである。すなわち，相談者がどのような「生き方」をすべきか，また，どのような行為を選択すべきかについて，「自己決定」という形式的な原理を重視する限りにおいて，回答者は何らかの実質的な答えを提示することはできないし，またすべきではない。しかしながら，相談者はまさにどのような「生き方」をするか，どのような行為を選択するかについて尋ねるのである。人生相談に相談をよせる相談者は自分の選択に不安を感じているからこそ他者に相談し，そうすることで自身の選択の正当性を確認しようとしているのであって，相談者のそうした悩みに対して「自分自身で決めるのが望ましい」とはいっても，それは問題を投げ返しただけでまた同様のプロセスが繰り返されるだけである。ここに自己の情緒的な充足感と拘束から解き放たれた選択主体としての自己を重視する言説空間の閉塞がある。そこには他者の判断や他者の助けを必要としている問いがあるにもかかわらず，自己の選択と判断に身をゆだね，自己の能力に依拠するしかないと答えざるをえないという，問いと答えがよってたつところの水準がかみ合わないというコミュニケーション状況がある。

個々人が自らの嗜好や価値観やライフスタイルを重視するなかで，人生上の問題は家族などの社会集団に関する事柄から，個人的な事柄へと変容している。一方で私たちは自由な生活，何にも拘束されない自己が選択の主体となる人生を望む。しかしながら，他方で私たちは切実に「誰かと共にある」人生も望んでいるのである。このジレンマは，たとえば労働市場を一般化し，男性役割の女性への拡大でもって解決できるものではない。従来の男性役割を模範として「男女平等」という近代的な理念の名のもとで，両性の経済的な自立の達成を追及することは，「貫徹された労働市場社会」（Beck 1986=1996）へといたり，市場に統制される孤立した諸個人の社会を意味している。

強制として推進される個人化と，それによる孤立と言説空間の閉塞性を前にして，今問われるべきは，個人か家族か，あるいは個人か個人の外側の世界かという問いの立て方そのものにあるのではないだろうか。個人の自由と他者と共にいることの矛盾を解消していくこと，すなわち，「私の自由」を確保しながら，他者と人生を共有し他者に束縛されることを引き受けていくことの双方を可能にするような新しい言説空間を構築していく試みがはじめられなければならない。

註

１）　セルフ・ヘルプ本とは「対人的なマニュアル」「礼儀作法」「セックス」「ライフスタイル」に関する心理学的ないしセラピー的な助言を提供する読み物の総称をいう（Miller and McHoul 1998）。セルフ・ヘルプ本のストーリー構造や語りの社会的条件についてはPlummer（1995＝1998）を参照。

２）　『読売新聞』の人生相談コラム「人生案内」の投稿規定には「生活上の悩み全般が対象。……純粋な法律や健康の相談，就職，結婚その他のあっせんなどは取り上げません」とある。

３）　このような構築主義的な視点から，ポッターとウェザエルは言語の遂行的な機能に着目した発話行為論とエスノメソドロジーに基づきなが

ら，人々がインタビューに答える中で，その談話によって何をしようとしているのか，回答者の言明が果たしている目的は何かを調べることを提起している。彼らの「言語や言説の使用者および操作者として人々を見る見方」についてはV．バー（1995＝1997）に詳しい。

4）　「人生案内」は日本で最も長くにわたって継続されている人生相談コラムである。『読売新聞』に「人生相談」欄がはじめて登場したのは1914年５月のことであり，「婦人附録」というタイトルで「婦人」面に掲載された。戦時中には中断するが，1949年11月27日から「人生案内」として再開され，2003年現在においても「家庭とくらし」面に掲載されている。

5）　このような性別分布は興味深い問題ではあるが，本稿ではそれについて取り扱わない。ただ，同じ新聞への投稿という点からみて，意見を述べるような投書欄へは男性からの投書が多いことが明らかにされている（国緒英子，1987,「投書のパタンと表現」『言語生活』10: 40-46; 佐竹久仁子，1995,「女の文体・男の文体」『ことば』16: 52-68; 熊谷滋子，1997,「投書とジェンダーをめぐって」『静岡大学人文学部人文論集』48(1): 345-362を参照）。たとえば，『朝日新聞』投書欄への投稿数集計によると，1997年１年間の投稿数のうち男性が64.2%，女性が35.8%であった（『朝日新聞』1997.12.31）。これに対して，「いのちの電話」という電話をとおした相談では男性からの相談が多くなっている。たとえば，「日本いのちの電話」連盟の集計によると，同じ1997年において，男性からの相談件数が330,223件，女性からの相談件数が260,119件と，男性からの相談が多くなっている（参照，佐藤誠・高塚雄介・福山清蔵，1999,『電話相談の実際』双文社）。これらの性別分布や相談をよせる媒体のちがいについて比較研究することは興味深い課題であるように思われる。

6）　家族に関する悩みは，配偶者，兄弟姉妹，親，子，祖父母，孫に関する問題である。家計や住居を共有している世帯（人員）と家族（成員）を区別し，必ずしも同じ住居に暮らし，家計を共有している人員に関する悩みとは限らない。また，本稿において家族（family）という場合，親子や夫婦などの社会的な関係を指しており，家庭（home）とは夫婦関係を中心とする家族成員が暮らす場所を指している。

7）　「結婚するのは当然」（1993年45％→1998年38％）とする人よりも，「必ずしも結婚する必要はない」（93年51％→98年58％）とする人の割合が大幅に多く，結婚にこだわらない生き方が支持されている（ＮＨＫ放送文化研究所編2000）。また，内閣府「国民生活選好度調査」（1997年）によると，結婚の利点について「一人前の人間として認められる」（30.6％），「周囲の期待に応えられる」（10.9％）といった社会的な利点よりも，「精神的な安らぎの場が得られる」（68.2％）と個人的な充足感を求める人が大幅に多くなっている（経済企画庁 2002）。

8）　「結婚しても相手に満足できないときは離婚すればよい」という考えに賛成する人は反対する人よりも多く，1997年においては半数を超える人が「離婚すればよい」という考えに賛同している。実際の離婚件数をみても，1980年141,689件，1990年157,608件，2000年264,246件と1990年代になって大きく増加している。離婚に関する意識が寛容になることは，離婚したくてもできないという葛藤や悩みの解消につながる。離婚件数の増加からみえるのは，離婚について悩むよりも，実際に離婚に踏み切ることが多くなったという現象であり，それは離婚問題という家族に関する問題の減少の一端を示している。

9）　内閣府「男女共同社会に関する世論調査」によると，「男は仕事，女は家庭」という考えに「同感する」人の割合は1985年の43.1％が2000年には25％にまで減少し，「同感しない」という人の割合が2000年には48.3％を占めるようになっている。

10）　既婚女性の就業が増加してきた要因には女性就業者の比率が高いサービス産業の雇用拡大，家庭電化製品の普及による家事の省力化や性役割に関する意識の変化をあげることができる。しかし，既婚女性の働く理由として「視野を広げるため」「自己実現のため」などいかなる理由

があげられるにしても，専業主婦が減少した要因には夫の雇用環境の変化によるところが大きい。近年，人件費を削減し（「リストラ」），年功的な処遇を見直す企業が相次ぎ，石油ショック後の1974年を境に大きく下降した男性就業者の実質賃金の伸び率は，1990年代においてはわずか0.2%の低水準にとどまっている（経済企画庁 2002）。性別役割規範に賛成あるいは反対するかにかかわらず，専業主婦でいることができるという経済的な条件が成立しなくなったのである。

11） 1978年における女性の労働力率は47.4％である（総務省「労働力調査」より）。また文部科学省「学校基本調査」から同年の大学進学率を男女別にみると，男子の大学進学率40.8％に対して，女子は12.5％と，大学進学率の男女差は大きい。このように女性が労働市場と高等教育から排除されていることは女性の経済的な自立の困難をもたらす。

12） このような夫婦関係における「愛情」の意味変容を山田昌弘の言葉を借りていえば，「動機づけとしての愛情」から「目的としての愛情」への転換といえるだろう。山田によれば，1980年代を境に「愛情があるから…する」という「動機づけとしての愛情」から，「愛情があるから幸せ」といったように個人の充足感を意味する「目的としての愛情」への変化がみられるという（山田 1999）。このような「愛情」の語られ方の変化は欧米のアドバイス本やコラム（人生相談コラムは英語圏においてアドバイス・コラムといわれている）の研究においても指摘されている。たとえば，アメリカの女性雑誌における結婚生活に関する記事を分析したカンシアンとゴードンは「自己犠牲と忠誠」から「性的な喜びとロマンス」として結婚生活が語られるようになったと論じている（Cancian and Gordon 1988）。それは，愛情と見なされるものが夫の服を洗濯したり，食事を用意するといった「他者に対する配慮」をともなう活動ではなくなり，「感覚を表現するもの」になったということである（Cancian 1986）。1970年から1990年までのアメリカのアドバイス本を分析したホックシールドはこのような愛情の語られ方の変化に一つのパラドックスを見いだしている。かつてのアドバイス本は開放的で平等なコミュニケーションに欠ける「家父長的」なものであったにもかかわらず，結婚生活の「あたたかさ」を強調していた。それが平等な結びつきが強調されるにしたがって，親密な関係の中で「冷たい（クール）」な情緒的な戦略が強調されるようになったのである（Hochschild 1993）。このような「愛情」の語られ方の変化を含めて，ゲアハードはアドバイス本ないしコラムにおける「感情」についての「認識論的転換」を見いだしている（Gerhards 1989）。

13） 個人化はベック以前にもウェーバーやエリアスなどによって近代化における「主体的・個人の生活記録的な観点」として論じられてきたが，今日の個人化の両義性についてはベックの他にメルッチも参照されたい。メルッチは社会化形式としての個人化に注目し，一方で個人化は選択肢の増加とそれを自己反省的に知覚した個人のコントロールの拡大をもたらすが，他方で自己再帰性をともなう社会のさらなる分化による統合と管理の集中化をもたらすと論じている（Melucci 1989）。ベック自身は個人化の両義性をとらえるために「解放の次元」「呪術からの解放の次元」「統制ないし再統合の次元」という三つの分析的次元に，客観的な生活情況と主観的な意識という二つの次元を加え，個人化論を精緻化している（Beck 1986: 207 =1996: 254）。

14） ここでいう孤立の問題は，個々人に心理的な意味で孤立感をもたらすという意味であって，社会形式として，個々人を社会から孤立させるという意味ではない。現在の高度に情報化した社会においては，社会規範の拘束力の弱体化は，個々人を社会から孤立させるのではなく，むしろ高度に発達した様々な情報メディアによって新たな選択肢，新たな生き方を自覚させながら社会へと再統合させるといえるだろう。

文献

Beck, U., 1986, *Risikogesellschaft auf dem Weg in eine andere Moderne*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.（＝1998，東廉・伊藤美登里訳『危

険社会――新しい近代への道』法政大学出版局。）

Beck, U., A. Giddens and S. Lash, 1994, *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Cambridge: Polity Press.（＝1997，松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳『再帰的近代化――近現代における政治，伝統，美的原理』而立書房。）

Bell, D., 1973, *The Cultural Contradictions of Capitalism*, New York: Basic Books.（＝1976, 1977，林雄二郎訳『資本主義の文化的矛盾』上・中・下，講談社。）

Bellah, R. N., R. Madsen, W. M. Sullivan, A. Swidler and S. M. Tipton, 1985, *Habits of the Hearts: Individualism and Commitment in American Life*, Berkeley: University of California Press.（＝1991，島薗進・中村圭史訳『心の習慣――アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房。）

Burr, V., 1995, *An Introduction to Social Constructionism*, London: Routledge.（＝1997，田中一彦訳『社会的構築主義への招待――言説分析とは何か』川島書店。）

Cancian, F. M., 1986, "The Feminization of Love", *Signs*, 11(4): 692-709.

Cancian, F. M. and S. L. Gordon, 1988, "Changing Emotion Norms in Marriage: Love and Anger in US Women's Magazines since 1900", *Gender and Society*, 2(3): 308-42.

Gerhards, J., 1989, "The Changing Culture of Emotions in Modern Society", *Social Science Information*, 28(4): 737-54.

Hochschild, A. R., 1994, "The Commercial Spirit of Intimate Life and the Abduction of Feminism: Signs from Women's Advice Books", *Theory, Culture and Society*, 11(2): 1-24.

経済企画庁，1997，『平成９年国民生活白書』。

経済企画庁，2002，『平成14年国民生活白書』。

Melucci, A., 1989, *Nomads of the Present. Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, London: Hutchinson Radius.（＝1997，山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳『現在に生きる遊牧民――新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店。）

Miller, T. and A. W. McHoul, 1998, *Popular Culture and Everyday Life*, London: Sage.

見田宗介，1965，『現代日本の精神構造』弘文堂。

NHK放送文化研究所編，2000，『現代日本人の意識構造〔第五版〕』日本放送出版協会。

Plummer, K., 1995, *Telling Sexual Stories: Power, Change and Social Worlds*, London: Routledge.（＝1998，桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳『セクシュアル・ストーリーの時代――語りのポリティクス』新曜社。）

Potter, J. and M. Wetherell, 1987, *Discourse and Social Psychology: Beyond Attitudes and Behaviour*, London: Sage.

思想の科学研究会編，1956，『身上相談』河出書房。

太郎丸博，1999，「身の上相談記事から見た戦後日本の個人主義化」光華女子大学『変わる社会・変わる生き方』ナカニシヤ出版，69-93。

山田昌弘，1999，「愛情装置としての家族」目黒依子・渡辺秀樹編『講座社会学２　家族』東京大学出版会，119-152。

Enclosed Discourse by the Logic of Self-Determinism; Changes in the Main Problems with Life-course in Japan.

IKEDA Tomoka＊

Abstract: What are the main problems with Japanese life-course? Using advice columns as a source of data for ordinary people's problems, I analyze the change of social consciousness in post-war Japanese society. First, outlining study of advice columns, I present an original view on advice columns which I see in terms of communication between questioners and respondents. Next, I show the trend in which the main problems with life-course are shifting from family matters to personal matters. Then, focusing on the meaning of "home" and "love" in women's life-course, it appears that a process based on the logic of self-determinism is coming to be emphasized in the communication between questioners and respondents. Finally, through surveying the theory of individualization of Ulrich Beck, I consider that the logic of self-determinism closes the discourse.

Keywords: advice columns, life's problems, life-course of women, love
self-determinism, individualization, Ulrich Beck

＊Part-time Lecturer in Ritsumeikan University